

平成二十九年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム・パネルディスカッション・質疑応答

著者	佐藤 達全, 山崎 和子, 山室 吉孝, 橋本 弘道, 仙田 考, 下室 覚道, 木村 清孝
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	23
ページ	65-80
発行年	2018-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000308



パネルディスカッション・質疑応答

パネリスト

佐藤 達全

山崎 和子

山室 吉孝

橋本 弘道

仙田 考

下室 覚道

木村 清孝

司 会
閉会の辞

司会

只今より、シンポジウムに移らせていただきます。会場の皆様には、長時間お座りいただきまして、大変申し訳なく思っております。まず、会場からのご質問が四〜五枚出ておりますので、各先生方にご意見をお願いしたいと思います。まず、佐藤先生。命を保護し、自立に向けた教育をするため、具体的に必要なのは何かでしょうか。

佐藤

佐藤でございます。「自立」ということですが、人間の赤ちゃんは、生まれた時は、自分が生まれたということも意識できない状態で、かなりの時間を生活していくわけです。そこでは、24時間ほとんど丸抱えといいますか、自分のへいのちを周囲の人に預けている毎日です。けれども、そのままの状態ですっと生き続けるわけではありません。ですから、自分で考えて生きるための力をつけていかなければいけないのです。こ

うしたことにつきましては、今日、ほかの先生方からお話がありましたように、環境を通して、そして自分がその環境の中に生きて、自分で気づいていくことが一番でして、「こうですよ」と、教えられてやっていくことではないんですね。ただ、残念なことに、今の教育がとにかく知識を詰め込むと言いますか、非常に偏っていて、そこが大きな問題だと思います。

補足的に付け加えさせていただきますと、お釈迦さまが説かれた「中道」という教えがあります。「いい加減」というお話をいただきましたが、中道と言いますと少しわかりにくい部分もあります。いい加減というのは、どれくらいがいいのかということですね。これを医学的に考えてみますと、私は人間の「いのち」には基本的なリズムがあると考えています。具体的には二拍子のリズムです。二拍子というのが人間の基本的な「いのちのリズム」ではないでしょうか。音楽で二拍子といいますと「強と弱」ですが、「いのちのリズム」では「緊張とリラククス」や「動と静」といったように、人間の身体や、心は相反する活動が互いに補いながら活動していて、そのバランスを保つことが必要だということですね。

呼吸や心臓の活動を例にあげて、具体的にお話してみましよう。「呼」は「吐く」という意味ですし、「吸」は「吸う」という意味です。吐くときは身体の力が抜けて（リラククスして）いますし、吸うときには力が入って（緊張して）いるのです。また、心臓は一日に十万回も収縮と弛緩をくり返して全身に血液を送り出しています。どちらの営みも生命を維持するための基本的な営みですが、私たちの体内では生きている限り、このような活動が続いているのです。呼吸は短い時間でしたら意識的に二回吸って一回吐いたり一回吸って二回吐いたりすることはできますが、長くは続けられないでしょう。心臓の活動は、自分の意志で拍動（収縮と弛緩）緊張とリラククス）をコントロールすることはできません。

つまり、緊張とリラククスを交互にくり返すことが人間の基本的な「いのちのリズム」と言えるのではない

でしょうか。「緊張とリラックス」や「動と静」といった相反する営みのバランスが保たれる（意識的にも無意識的にも）ことが、心身ともに健康に生きるためには重要な意味を持つてしていると私は考えています。私は素人ですから間違っているかもしれませんが、これをさらに医学的に申し上げますと、緊張とリラックスのバランスというのは自律神経の基本ではないかとも考えています。私たちの体内では交感神経（身体の活動を促進させる）と副交感神経（身体の活動を抑制する）が相互に作用しあって、体温や脈拍が一定に保たれることはもちろん、さまざまな生命活動をコントロールしているのです。

お釈迦さまが説かれた中道の教え（二拍子のリズム）は、このような身体の仕組みにまでつながっていると思います。（*私がこのように考える理由は二つあります。一つ目は、お釈迦さまは王子として帝王学を学んだと言われるからです。帝王学には医学も含まれていましたので、仏典には医学的な内容が非常に多く見られます。二つ目は、お釈迦さまが活動された時代のインド医学がかなり高度で、ススルタやチャラカといった内科や外科の有名な医師がいたことや、タキシラという町には医科大学があつて、麻酔をして頭部の切開手術が行われていたという記録があります。）

こうしたことから、昭和三十年代には「仏教医学」にもかなり関心が寄せられて、専門的な論文や著書もたくさん出版されました。お釈迦さまが気づいた（発見した・悟った）「人間の〈いのち〉についての真理」というのは、単なる道徳的な教えにとどまらず、もつと奥の深い〈いのち〉の本質を示しているのだと思います。そして、このことは「あらゆる〈いのち〉が絶えず変化しながら存在している」という諸行無常や、「すべての〈いのち〉は直接的・間接的に関わりながら存在している」という諸法無我という仏教の基本的な世界観・人間観にもあてはまるものです。諸行無常や諸法無我はお釈迦さまの教えの基本ですが、その人間観や生命観はキリスト教徒にもイスラム教徒にもあてはまる〈いのち〉の原理と言えるからです。

司会 ありがとうございます。続きまして、山崎先生への質問です。三松幼稚園の卒園児が、一般の小学校等の先生から、「他の幼稚園の生徒に比べて、さすがしつけが行き届いてる」と評価されたことはありますかという質問と、もう一点、三松幼稚園の中に、ご両親、親御さんが仏教以外の信者の方の園児はいましたか、というご質問です。

山崎 はい、ありがとうございます。一点目は、小学校に行った時に、三松幼稚園の子と比べてどうなのかと言うと、たいがい、「おとなしい」という風に言われます。それが良いかどうかは分かりませんが、話を聞くという事は出来ているのかなという風に自負しております。それから二点目なんですけれども、もちろんおります。色んな宗教を持った方がおります。先ほどお話ししたように、仏教ですごく心が広いんですね。どうい宗教でも良いんですよ、って言うっているのです。三松幼稚園も、曹洞宗じゃなくちゃなりません、仏教でなくてはなりません、なんていうことは全くありません。三松幼稚園から、小学校はキリスト教の学校に行かれる方もあります。以上でございます。

司会 ありがとうございます。続きまして、山室先生へのご質問。これは大変難しい問題かと思えますけれど、「自己犠牲」に関しまして、お二人の方からご質問があります。お一人の方、究極の利他行、布施行は自己犠牲を伴うものではないのでしょうか、という質問ですけれども、自己犠牲ではないというご主旨の山室先生のご発表に対してかと思えます。それから、大乘仏教において、自己犠牲が利他の条件となってしまう原因は何でしょうか、というご質問です。ちょっと難しいですけど、お答えできる範囲でお願いしたいと思います。

山室 私も、学生と関わることが多くて、例えば、面倒を見て、感謝されないこともあります。でも、あるとき、私の研究室のポストに、「死にたい」という学生からの手紙が入っていますね、もちろん、「生まれ変わったら、

司会

先生結婚してね」とかの手紙もあるんですが、そういう「死にたい」というびつくりするような手紙がございまして、びつくりして呼び出して、話を聞いていたら、これは私の手に負えないなと思ひまして、すぐ保健センターに電話しましたら、精神科の先生がおられました、「予約取っておりませんが、どうにかありませんか」と問い合わせましたら、すぐに、「良いですよ、そういうことでしたら来て下さい」と言われましたので、私もその学生に、「カウンセラーの」先生がすぐ来て下さいと言ってますよ」と言ったんですね。そしたら、「そんな会ったこともない人に悩みなんか打ち明けたくない」と。私はその先生に繋がって、なんとか助けになるのかなと思っただんですけど、「じゃあ、先生と一緒に行くか」と聞いたら、「先生となら一緒に行く」ということでしたので、私も一時間半、一緒にカウンセリングを受けてきました。その時に、自己犠牲的なところがあるかもしれないけれど、その子からは、就職した今でもメールが来て、「今度会いたい」とか「見て先生、こんなものを作ったのよ」と、しょっちゅうメールで送ってくるんですね。ですから、その時は、自己犠牲的だったかもしれないけれど、その後には何倍も恩恵というか、喜びというものが返ってくる。それを考えますと、自己犠牲と言っているのかなという感じは致します。もう一つ、自己犠牲が大乗仏教の条件となってしまう原因ですね。これは私よりも木村先生にお答えしていただいた方が良いと思います。

木村清孝先生には、後ほど、最後にご挨拶いただきたいと思うんですけど、その時にお願ひしたいと思ひます。自己犠牲ということに関して、道元禪師は『正法眼蔵』の中に、「菩提薩埵四摂法」の巻というのがございまして、その「四摂法」の巻の中の、利他行の説示の一節に、「利他をさきとせば、自が利、はぶかれぬべし」と。愚かな人は、利他行、他人に施すということは、自分が損するんじゃないかと、こう考えるのですけれど、「しかにはあらざるなり」。そうではないと、「自他おなじく利するなり」と、自己犠牲と言っても、

先ほど、山室先生が学生と今でもお付き合いする仲ということですから、その人のためになることをするのですが、自分が損をするわけではないということを知っておかなければならないのかなと私は感じております。司会が口を挟み失礼致しました。

それでは、続きまして、橋本先生、こちら大変難しいと思いますけれども、お二人の方からです。理解＝悟り、悟りを得るために最も必要なことはなんですか、という大変難しい問題と、四諦ですね、四諦八正道の四諦の、具体的実践例を知りたいです、これも悟りと関わる大変難しい問題ですけど、どのようにお答えになるでしょうか。

橋本

悟りを得るために必要なことですか。私も悟っているわけではないのでわかりません(笑)。ただ、悟りを得るための道筋については、釈尊も示されていますし、例えば、祖師や先達もさまざまな形で示されていると思います。釈尊は、自灯明、法灯明と仰ったわけですから、自分を頼りにし、さらに、これまで釈尊が説かれてきた法を頼りに修行を続けることが悟りへと繋がっていくことなのではないかと思えます。また、道元禅師は、「正師を得ざれば学せざるに如かず」と仰っています。ということは、誰のもとで学ぶのかということがとても大切だということなのだと思います。

私も釈尊の悟りについては常々考え続けています。また、それと同時に考えるのは、釈尊は自分の悟りを他者に伝えるために大変に苦勞なされたのではないかということです。悟りを理解と置き換えるのは少々強引かなとも思いますが、例えば、悟りを世の中の法則を理解することだと考えると、次に考えるのは、理解って何だろうということですね。私たちは学問の世界に生きていますが、学問的に世の中の法則を理解することとはどういうことなのだろうかと考えると、例えば、社会学の分野では、世の中にある様々な変数を単純化・モデル化して把握をするというやり方をしています。そういうことを繰り返しながら、世の中

の法則への理解を深めていくということです。私たちが釈尊の悟りの一部を理解しようとした場合、例えば、縁起説によって、世の中は原因と縁と結果の連鎖によって流れていくという理解をするわけです。これは、ある意味でモデル化だと思えます。四諦八正道の四諦もその意味では苦から離れるための方法をモデル化しているのだと思います。このように、単純化・モデル化をして把握するというのが、理解なのだと思えます。釈迦の悟りは、本当はもっともつと複雑なものだと思えますが、釈尊が私たちにそれを言葉で伝えようとした場合、モデル化して示すことによって相手の理解を深めていく努力をされたのではないかと思えます。ですから、釈迦の悟りの内容を我々が理解しようとする時には、釈尊の悟りの内容が様々な形でモデル化されたものを学び、これが世の中の法則なのだ、悟りなのだとして理解するところから始めるということが、結果的に悟りを得るための道筋として必要なことなのではないかと思えます。

ただ、最近思うのが、やはり、理屈で分かったということだけでは駄目で、体得するというレベルに至るということが重要であるように思います。頭で分かっているだけでは駄目なことはたくさんあります。例えば、仏教では怒りを克服することを説いていますが、それを頭でわかっているだけでは限界があつて、やはり、うことはあるわけです。それをどうするかということになると頭で考えるだけでは限界があつて、やはり、体得するという段階が必要であるように思います。その体得するということに繋がっていくのが坐禅だと思えます。最近、マインドフルネスが流行っているようですが、やっていることは坐禅そのものです。マインドフルネスと呼び宗教性を排除したことで、その効果について科学的な研究が進んだといえるのかもしれませんが、実際、脳科学的にも心の安定にとっても寄与していることが証明されつつあるようです。そのように考えると、頭で理解することと体を通して将に体得するということの両方からのアプローチが悟りを得るために必要なことなのではないかと思えます。

もう一つのご質問の四諦の具体的な実践例ですが、多分、これまでの話にもつながると思うのですが、物事を分析的に見て具体的な解決策を考え実行していくことを示したのが四諦なのだと思います。保育科の学生によく言うのは、実習に行く際には、自分が行ったことを客観的に自覚しなくては駄目で、例えば、上手くいかなかったら、なぜ上手くいかなかったのか、客観的に専門知識に基づいて色々と考えてみなさいということを行っています。少し話がずれるかもしれませんが、保育科では現場での実習が必ずあつて、私たち教員は、必ず実習中に一回は実習巡回指導に行つて、実習がどういう状況かということや学生にも聞きますし、園長先生や担当の先生にも聞きます。学生に聞いたときに、一番心配になるのは「大丈夫です、うまくやれています」と言う学生です。それが一番怖いんですね。その答えを聞くと、「本当に大丈夫かな」と思うわけです。実際に園長先生に聞いてみると、「出来ていないのに反省する態度が見られない」と言われて、「やっぱりそうか」ということが多いわけです。逆に、「一所懸命やつているんですが、うまくいかないんです」という学生もいるわけです。その学生は、大抵大丈夫なんです。園長先生や指導いただいている先生に聞くと、「大丈夫ですよ、いろいろ上手くいかないところもあると感じているようですが、反省しながら一所懸命やつてますよ」と言われるんですね。要するに、自分が出来ているか出来ていないかということや自覚出来ているかということや問題で、最初の実習で上手くいくということは少ないわけですが、上手くいっていると思うことは、自分が出来ていないということすら自覚出来ていない段階であるという場合が多いわけです。そうすると、その先には反省も何も無いわけです。「私は子どもたちにも好かれていて、とても上手くやれています」と言っている段階は、四諦で言うところの苦諦の入口にも立っていない段階と言えるのではないかと思います。「私、頑張つて一所懸命いろいろやつているんですけど、どうも上手くいかないんです」という段階は、少なくとも苦諦の入口には立っている学生だということになるのだと思います。まず、しっかりと自分の現状を客観的に自

覚出来るかということが何をするにしても非常に重要なのだと思います。ある意味、四諦の入口については、そういうことを言っているのではないかと思えます。まずは、しっかりと自分のことを客観的に分析して、更にどうすれば良いのかということをお自分の頭で考えていく。考えていくんだけれども、例えば、それは保育で言えば、保育の専門的知識に基づいて考えていくということが大事で、そうした過程において、例えばPDCAを回していくということが、専門家の専門家たる所以になると思います。反省的实践者ということをする人たちは、実践しながら反省し、次のステップに進んでいくことを勧めています。釈迦は苦を取り除く方法として四諦を論理化して説明したのだと思いますが、それは我々が普段、様々な課題に臨む際の一つの解決方法になると言えるのではないかと思えます。結局、具体的な答えにならなくて申し訳ありません。以上、私の考えを述べさせていただきました。

司会

ありがとうございます。それでは、仙田先生。ご意見が二つ。「子供はできる限り、意識して自然環境の中に置いて育てるのが一番良い」と。先生のやり方に賛成ということですかね。それから、「環境教育を専門とする先生が鶴見大学におられるということは、素晴らしいと思う。仙田先生のご活躍を祈る」というご意見がごございます。また、質問が二つございます。お散歩ガーデンは一般の人も見られるところなのか、ということ。もう一つが、環境活動をしてきた成果はあるか、先生が活動をしてこられて、学生に対して、成果はあるかということだと思っております。或は、先生自身の人生に何か良き成果があったのかということでしょうか。

仙田

はい、ありがとうございます。最初の方の、「出来るだけ自然環境の中で子どもたちを育てるのが良いのではないか」というご意見についてですが、昨今は、園庭がない保育園も増えてきたり、園庭があったとしてもほと

んど植物がなかったり、小さな砂場がある程度といった所もあります。私は造園、特に樹木が専門ということもあり、子どもたちが植物とふれあえるきっかけを、園庭でもお散歩でも、テラスで小さなプランターで育てるということであっても、何かしらやってみようかと、とても大事ではないかと思っています。先日、北海道でこども環境の学会がありまして、視察園の課外活動場所はとも森の豊かなところで、これは東京横浜では難しいなという現実を思い知ったところはあったのですが、こちらの環境のなかで、出来ることを一所懸命考へながら行っていくことがとても大事ではないかなという風に思います。

そしてお二方目のご意見ですが、私は、幼稚園や保育園での園庭環境づくりであったり、環境教育や園庭環境の調査・研究に長年関わっていたのですけれど、保育・幼児教育が元々の出身ではないので、保育を教えるということは、大変手探りなところはございました。保育者養成校での非常勤は長いのですが、鶴見にご縁をいただいて、皆様の御力をお借りしながら、精一杯自分に出来ることをさせていたでいるという状況です。鶴見では環境や生活の授業を担当する中で、一年目に附属の三松幼稚園で学生と園児と一緒に野菜のプランターを育てるということをしていたのですが、二年目はやはり地植えがしたい、根菜、大根が育てたいと思いまして、学内にぜひとも畑があったらと思いました。畑を作るのであれば、学生はもちろん、教職員、子どもたち、地域の方々が、見えるところにしたいと。見えにくい場所ですつそり行うのではなくて、誰でも見れる、みんなに声をかけてもらえるところに作りたい、というところで、学内の皆さんが通る、五号館と六号館の間の回廊道路沿いの空き地に、ご本山に了承をいただいで実現することができました。一般の方もご覧いただけます。近くの方々がよく見に来てくださって、学生と草抜きなどしていますと、皆さん声をかけてくださるのです、「大変ですね」って……。でも、それがある意味、私もそうなんですけれど、何より学生たちの励みになっているので、皆さん、学生が作業していたら是非お声をかけていただけたら、どんなに励みになるかと思いま

す。よろしく願います。

そして「環境活動の成果」について、保育科菜園「おさんぼガーデン」の事例からお話したいと思います。昨年度から担当しています「生活科学」という授業で、春夏野菜を育てようということで、菜園で活動しています。保育科二年生の授業だったのですけれど、二年生の後期は、昨年度は栽培の授業は無かったです。生活科学を履修していた学生たちが、「栽培は通年だからね、園は秋冬もやっているんだよ」と話してきていたのですが、授業がないということだったので、履修生たちは前期の活動が楽しかったらしく、後期も続けたいという話になりました。そこで自主ゼミです。授業ではないのですけれど、後期に履修生たちと、そして前期に授業が選択できなかった学生たちも合流して秋冬栽培を行いました。その学生たちのうち、三名ほどが専攻科に進学したのです。大学で言いますと三年生の学年にあたるのですが、保育科を卒業して、福祉専攻に進みました。私は専攻科は保育専攻の教員で、福祉専攻の授業は持つておりませんが、また授業で行うことはむずかしい。それでどうするか聞いてみますと、今年度もやりたいということ、自主ゼミを続けることにしまして、菜園の一角に福祉専攻の学生たちの栽培場所を作りました。その学生たちはいま活動丸二年目に入りました。いまは、昨年の授業時のように、やり方を一から教えるのではなく、彼女たちも自立しています。自分達で計画を立て、栽培したいものを一所懸命やっています。母を育てたり、秋冬になると、大根もいいかもしいかなどと話しています。そうしたこと、この経験が将来の栽培計画や活動につながるということもきつとあるでしょうし、福祉専攻の学生たちはいま介護福祉士資格を目指して勉強をしているのですけれど、将来は保育園・幼稚園の先生になりたいと話していて、現場で是非、子どもたちと一緒に栽培を行うきっかけになってくれればと思ったりしています。長くなりました。失礼致しました。

司会

ありがとうございます。お時間も迫っております。私、本当に門外漢でございまして、保育については全然わかりません。しかし、「三つ子の魂百まで」という言葉もありますように、本当に幼児期における教育というものは大切だということを先生方から教わったと存じます。五人の先生方に共通する言葉として、「いのち」という言葉がキーワードだと思います。「保育というのは、いのちを保護して育てる」という佐藤先生のお言葉にも感銘しました。それから、佐藤先生が「仏教とは宗教ではない」と言い切っておられて、これも私、個人的に感銘致しまして、「哲学・人間学である」ということ。そこからいきますと、全ての方、キリスト教・イスラム教を信じている方にも、仏教の教育というのには有益であるのかなと思いますけれど、各先生方、何かご講演に何か付け加えることがありますでしょうか。

佐藤

最後にこれだけではどうしてもお話しておきたいことがあります。〈いのち〉の大切さというのは、言葉で教えられて身につくのではなく、〈いのち〉とふれあうことによって自分の心の中に自然に芽生えてくると考えることが非常に重要な点です。他の先生からも、教育よりも保育士の体験を通してというお話がありました。私たちは今、あまりにも知識を増やそうとしたり理屈を学ぼうとしたりして、身体を使って気づいたり身に付けたりすることの重要さをどこかに置き忘れてしまったのではないのでしょうか。日本では昔から「体得」ということが重視されてきました。「身体で覚えたことは忘れない」とも言われます。

しばらく前のことです。学生が実習させていただいている保育園を訪問したときに、園長先生からすばらしいお話を伺いました。群馬は自然が豊かで、園庭や近くの畑で野菜を育てたり生き物を育てたりしている園が少なくありません。ある年にミニトマトを育てたそうです。みんなで苗を植えて、お水をやったり草を取ったりして大事に育てていました。やがて花が咲いて、小さな実がたくさんなりました。だんだんと実が大き

くなり、赤く色づいてきました。子どもたちは「先生、いつ採るの」と、口々に聞いてきます。

そこで、担任の先生がほかのクラスの先生方と相談して、「みんなは何日に採りましょう」と伝えると、子どもたちは毎日「先生、あと何日だね」と待ち遠しそうでした。そして、いよいよその日になると登園した子どもたちが「先生、今日だね」と、口々に言いました。ところが、みんなで畑に行つて先生が「これから採りましょう」と声をかけてもだれひとり採ろうとしないのです。その場を動かなかったそうです。先生が不思議に思つて、「どうしたの、採らないの」と言つたところ、どんな言葉が返つてきたと思いますか。「だつてかわいそうだもん」です。誰も教えていないのですね。私はここが非常に大切なことだと思ひます。

今は体験したり身体を使つたりすることが非常に少なくなっていますが、へいのちを大切にすることを心というのは、動物や植物（野菜）を大事にお世話したり育てたりしていく、そういう中で自然に芽生えてくるのではないのでしょうか。子どもの心には、もともとそのような芽が備わっているはずですから、その芽が伸びていくような環境を整えていくことが必要だと私は考えています。

司会 貴重な見解、ありがとうございます。お時間になりましたので、以上をもちまして、閉会したいと思います。

それでは、本研究所特別顧問・東京大学名誉教授・鶴見大学元学長であります、木村清孝先生より閉会のご挨拶をお願いしたいと思います。

木村清孝特別顧問 木村でございます。閉会の辞は副学長の前田先生にさせていただくことになっていたのですが、学合のご都合でどうしてもご無理ということで、代わつてご挨拶を申し上げます。本日はそれぞれご発表をいただき、また、パネルにご参加いただきました五人の先生方、長時間にわたつて、まことにあり

がとうございました。本当に良い公開講座にさせていただきました。また、こうして最後までお付き合いをいただいた皆様方、ご静聴ありがとうございました。今日は、私も学長を辞めた後、初めて最後まで一緒にさせていただいて、いくつも新しい学びを得られました。先ほど、司会の下室先生が、「仏教は宗教ではない」ということに絡めて、少しお話がありました。私も保育の問題を通して、改めてそのポイントが、より明らかになったのではないかと、そのように思っております。それから、今日の「仏教に学ぶ保育の原点」ですが、子供さんの教育のことを保育というわけですけれど、子供さんたちの教育・保育の問題というのは、実は私達自身の問題ではないかと思えます。子供達に学ぶと言いますか、子供達から学びつつ、先ほどもお話ございましたように、命を育んでいくようなあり方、つながりをしっかりと作っていくことを常に考え、実践していかねばならないんじゃないか。つまり、私達自身の問題として捉え直したいと、そのような気持ちになりました。

それからもう一つ、主題としては仙田先生からお話ございましたが、環境の大切さですね。私は環境というものを考えるときには、家庭環境から社会環境、文化環境、自然環境、全部が重なりあっておりますが、やはり、人は環境によって育てられていくんだということを感じました。環境を大切に作る、良くしていくということが、一人一人の責任として、私達がきちんと自覚するということを心に刻んでおきたいと思えました。そんなことで、とても収穫の多いシンポジウムになったことを、心から感謝申し上げます。

最後に、少し触れられました利他の問題ですが、ちよつと感想的なことを述べていただきます。私は、そもそも利他という概念は自利に対応させて、大乘仏教の展開の中で作り上げたものだと思います。しかもそれは、自分と他人を対立的に二つに分ける二分法によつてです。だから、どうしてもそこには偏りが生じてくる。また下室先生が言及されましたが、利行と言うのは、この漢訳語自体にも問題があります。これは

単純に「他者に利益を与える行い」と一般に理解されてしまいますけれども、インドの原語では、「等しく利する」「等しくするためにすることをする」という意味なんです。だから、漢訳でも「等利」と訳しているものもあります。「平等な利益」というのは、人のためにも我のためにも、全てのもののためになるというのが、恐らく本来の仏教の考え方であろうと思います。ご質問の中に、「究極の利他行は自己犠牲的なもので、それは自分を捨てるということにもなるのではないか」というものがありましたね。例えば、「捨身飼虎」の話。有名な伝承として、前世において修行中の釈尊が、飢えた母虎が自分の子供達を育てられるようにと、自らの肉を与えようと身を投げるとい話です。こういう話から連想されたのかなとも思いましたけれども、これは一つの慈悲行のモデルとして生まれた伝承だと思っんです。私達が持っている執著、とらわれの心、ここから色々な苦しみが出てきます。苦しみが生まれるぎりぎりのところというのは、自己へのとらわれというものではないでしょうか。そういう自己へのとらわれを離れることを目指していく、それが一つの修行の大きな目的でなければならぬということを表すモデル的なお話として、「捨身飼虎」の説話はできたものなんじゃないのかなと、私は勝手に推測しています。ともあれ、本来の「利行」の意味は、「等しく利する」です。私どもは生きている限り、命がある限りは、自己へのとらわれから離れ切れることは難しい。「煩惱を断ずる」と言いますが、実はこれは、「煩惱をどうコントロールするか」ということなんです。どこまでしっかりと自分をコントロールして、ためにならないことはしないように、という方向で行動を展開させていくのか、それが課題なのです。根本的に言えば、自己へのとらわれが、そもそも生きていることの支えになっているんだということを、少し見直してみなければならぬのではないのでしょうか。そういった問題を改めて感じました。なお、利他的な行いについて、国語辞典で、「自己犠牲」という言葉を使って説明することもありますが、ために、混乱が起こっている側面があるとも思っんです。概念化の仕方、どう意味づけるかにもよりますが、

これはあまり良い説明ではないと考えます。そこをまず押さえなければならぬ。辞書に載っていますと、その説明を鵜呑みにする、あるいは情報化の中で Wikipedia などに出てくるものを、そのまま信じて、正しいと見てしまう。そういうことが多いですが、辞書などに書かれているから絶対正しいんだとは思わないでいただきたい。辞書の説明を見る際には、少なくともいくつかの同類の辞書を見ていただきたい。正しく理解するためには、一つの辞書にだけ頼ってはいけないということを、蛇足ながら付け加えさせていただきますと思います。

あれこれと余計なことまで申し上げましたが、今日は長時間にわたって充実したシンポジウムになったことを心から感謝申し上げます、閉会の辞とさせていただきます。ありがとうございました。